月　日　名前

／50点

【中3】国語 文章テスト　説明文 1/2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ルールと聞くと、自由をしばるもの、面倒なものを思いうかべる人が多いだろう。たしかに、ルールがなければ、好きなときに好きなことができる。しかし、ルールのない場所は、本当にすべての人にとって自由なのだろうか。

公園の砂場を思いうかべてほしい。遊び道具の使い方に何の決まりもなければ、体の大きな子や声の大きな子が、道具を好きなだけ使うことになる。小さな子は、その横でただ待つしかない。ルールのない場所では、自由はすべての人に等しく配られるのではなく、力の強い人のところに集まっていくのである。

順番を決める、使う時間を区切る、といったルールは、このかたよりを正すためにある。ルールは、力の強い人の自由を少しだけ制限し、そのかわりに、弱い立場の人にも自由が届くようにする。つまり、多くのルールは、自由を奪うためではなく、自由を分け合うためにあるのだ。

ただし、ルールがいつも正しいとはかぎらない。作られたときには意味があっても、時代や状況が変わり、誰のためにもならなくなったルールもある。そのようなルールを、ただ「決まりだから」と守り続けるのは、ルールの目的を忘れることになる。

大切なのは、ルールに出会ったとき、「このルールは誰を守っているのか」と問うことである。その答えが見つかれば、ルールを守る意味が分かる。答えが見つからなければ、ルールを見直すきっかけになる。ルールを守ることと、ルールについて考えることは、決して対立しない。考えることでこそ、ルールは本当の意味で私たちのものになるのである。

（この問題のための書き下ろし）

問一（十点）　筆者は、ルールのない場所では自由はどうなると述べていますか。「～いく」につながるように、本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問二（十点）　筆者は、多くのルールは何のためにあると述べていますか。本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問三（十点）　「ルールの目的を忘れることになる」とありますが、どういうことですか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　誰のためにもならなくなったルールを、理由を考えずに守り続けると、ルールが本来守るはずのものを見失うということ。

イ　ルールを守らない人が増えると、ルールがなくなってしまうということ。

ウ　ルールは古くなるほど価値が上がるので、変えてはいけないということ。

エ　ルールを作った人の名前を、みんなが忘れてしまうということ。

問四（十点）　筆者が、ルールに出会ったときに「このルールは誰を守っているのか」と問うことを大切だと考えるのはなぜですか。答えが見つかる場合と見つからない場合にふれて、六十字以内で説明しなさい。

問五（十点）　本文の内容に合うものとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　ルールはすべて守るべきであり、疑うことは許されない。

イ　ルールがなければ、すべての人が同じように自由になれる。

ウ　ルールを守ることとルールについて考えることは対立せず、考えることでルールは本当に自分たちのものになる。

エ　ルールは、力の強い人を守るために作られることが多い。

月　日　名前　　／50点　　合計　／100点

【中3】国語 文章テスト　物語文 2/2

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

最後の大会が終わった翌日、ぼくは部室の鍵を持って、二年生の佐伯を待っていた。次の部長は佐伯に決まっていた。鍵を渡すのが、部長としての最後の仕事だった。

佐伯は、一年生のころ、練習をよく休んだ。やる気がないのだと思っていた。ぼくは何度も注意した。きつい言い方をしたこともある。そんな佐伯を、顧問の先生が次の部長に選んだと聞いたとき、正直に言えば、納得がいかなかった。

部室のドアが開いて、佐伯が入ってきた。

「部長、話ってなんですか。」

「もう部長じゃないよ。」ぼくは鍵を差し出した。「これ、今日からお前が持つんだ。」

佐伯は鍵を受け取ると、しばらく手のひらの上で見つめていた。それから、ぽつりと言った。

「一年のとき、休んでばっかりで、すみませんでした。」

ぼくは驚いた。佐伯は、少し迷ってから続けた。家の事情で、あのころは弟の世話をしなければならない日が多かったのだという。誰にも言えなかった、と。

「でも、部長が毎回注意してくれたの、うれしかったんです。まだ部員として見てもらえてるんだって思えたから。」

ぼくは、何も言えなかった。注意しながら、ぼくは佐伯の事情を一度も聞こうとしなかった。先生はきっと、ぼくが見ていなかった佐伯を見ていたのだ。

「佐伯。」ぼくはやっと口を開いた。「来ない部員がいたら、まず理由を聞いてやってくれ。おれは、それができなかったから。」

佐伯は、鍵をにぎりしめて、うなずいた。

部室を出ると、グラウンドから一年生のかけ声が聞こえた。明日から、あの声を聞くのは佐伯だ。ぼくは振り返らずに、校門へ向かって歩いた。

（この問題のための書き下ろし）

問一（十点）　一年生のころの佐伯について、ぼくはどう思っていましたか。本文中から十字以内で抜き出しなさい。

問二（十点）　佐伯が一年生のころ練習を休んでいた理由を、本文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

問三（十点）　佐伯が、ぼくに注意されたことを「うれしかった」と言ったのはなぜですか。最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　注意されることで、練習を休む理由ができたから。
イ　注意されることで、まだ部員として見てもらえていると思えたから。
ウ　ぼくに注意されることが、ほかの部員への自慢になったから。
エ　注意されたおかげで、弟の世話をしなくてよくなったから。

問四（十点）　「先生はきっと、ぼくが見ていなかった佐伯を見ていたのだ」とありますが、どういうことですか。六十字以内で説明しなさい。

問五（十点）　ぼくが佐伯に「まず理由を聞いてやってくれ」と言ったときの気持ちとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア　自分が部長としてできなかったことへの反省を、次の部長に託したいという気持ち。
イ　佐伯がまた練習を休むのではないかと、疑う気持ち。
ウ　自分の注意のしかたが正しかったと、佐伯に分かってほしい気持ち。
エ　部長の仕事が大変なので、早く引退できてほっとする気持ち。